

国際センター通信 (No.12)

第6回アジア土木技術国際会議(6th CECAR)参加報告

2013年8月20日～22日に、第6回アジア土木技術国際会議 (Civil Engineering Conference in the Asian Region : CECAR) がジャカルタで開催されました。本会議は、アジア土木学協会連合協議会 (Asian Civil Engineering Coordinating Council 以下 ACECC) の一大イベントであり、3年ごとに開催されます。今回は、インドネシア土木構造工学会が運営を担当しました。

会議初日の開会式では、ジャカルタ協定の調印式も行われました。持続可能な未来に向けて、メンバー学協会が責任をもって活動していくことを誓っています。調印式には、橋本土木学会会長をはじめ、メンバー学協会の会長が一堂に会し、協定書に署名しました。



土木学会 国際センター
ACECC 担当委員会委員長
山口 栄輝



ジャカルタ協定調印式

発表は、基調講演、一般講演セッション、オーガナイズドセッションに大別されます。基調講演者の一人は、藤野陽三氏 (東京大学) であり、非常に多くの聴衆が集まりました。一般講演は公募に応じた研究発表で、運営委員会の審査を経た論文に基づいた発表です。合計 239 件のうち、43 件が日本からの発表でした。オーガナイズドセッションは、ACECC のメンバー学協会や技術委員会が企画・運営するものです。土木学会は、Asian Board Meeting、Tsunami セッション、ITS セッションの企画・運営に中心的な役割を果たしました。

ACECC はプロジェクト賞と業績賞を設け、アジア土木技術国際会議で表彰しています。今回は、中日本高速道路株式会社の「新東名高速道路の建設」が、プロジェクト賞の中でも特に優れたとされる最優秀プロジェクト賞の荣誉に浴しました。業績賞は、岡田宏氏 (第 86 代土木学会会長) が受賞しました。(写真 1)

本会議にあわせ、土木学会はインドネシア在住土木技術者との交流会、「バリ島緊急海岸保全プロジェクト」視察ツアーを企画し、好評を博しました。また、インドネシア土木構造工学会との協力協定の締結 (写真 2)、ネパール技術者協会との協力協定更新も行いました。

次回のアジア土木技術国際会議は、アメリカ土木学会 (American Society of Civil Engineers :以下 ASCE) が運営を担当し、2016 年にハワイで開催されます。閉会式において、引き継ぎが完了し、ACECC 会長には ASCE の Yeung 氏、ACECC 事務総長には土木学会の堀越研一氏 (大成建設) が就任しました。



写真1 ACECC 賞受賞者
岡田宏氏(左端) 中日本高速大川氏(右から2番目)



写真2 土木学会とインドネシア土木構造工学会
の協力協定締結

平成 25 年度土木学会スタディーツアーグラント報告

土木学会は創立 75 周年の記念事業で集められた学術交流基金を活用し、スタディーツアーグラントとして毎年海外協定学会の推薦を受けた土木を学ぶ優秀な学生や若手技術者を日本に招聘しています。今年度は Mr. Pham Thanh Tung (ベトナム)、Mr. Pich Chanvichet (カンボジア)、Mr. Ali Bin Sohail (パキスタン) の 3 名の学生 (学部 2~4 年生) を 8 月 29 日から 9 月 7 日までの 10 日間日本に招聘しました。滞在中は、施工現場や研究所、大学、東北被災地を訪問し、最後の 3 日間は土木学会全国大会に参加するなど、多忙なスケジュールではありましたが、3 名とも終始目をいきいきとさせ、どの行事にも大変積極的に参加していました。



学術交流基金管理委員会
委員 高木泰士



NEXCO 東日本 新葛飾橋工事視察

施工現場としては、NEXCO 東日本発注の橋梁および道路の現場を見学し、日本の技術、品質管理のレベルに感嘆するとともに、母国にどのように生かしていくかを真剣に考えている様子でした。土木研究所では耐震や水理実験、また鹿島研究所では耐震、省エネ、新素材などの実験施設や最新の技術に接するとともに、基礎研究の重要性を実感したようでした。また、東京工業大学では日本人学生・留学生と交流を行い、留学や就職など自身の将来を語り合うなど親交を深める機会となりました。

さらに今回は、東日本大震災による被災や復興の状況を視察するツアーを実施しました。母国では津波や地震はほとんど問題視されていないようですが、視察先の一つであった女川でビルが転倒・倒壊している様子を目の当たりにしたときは、言葉を失っている様子でした。ある学生は、この視察に加えて、日本滞在中にたまたま震度 3 の地震を経験したということもあり、帰国時には防災の重要性を強く認識するようになったと感想を述べていました。



宮城・石巻 津波被災現場視察

最後の3日間は、日本大学で開催された全国大会に参加し、サマーシンポジウムを聴講するとともに、多くのラウンドテーブル関係者や海外分会関係者と交流を持ちました。また、国際センター主催の若手ワークショップにも参加し、多くの留学生と活発な議論を交わし、その夜の交流会では日本への留学について色々と情報収集を行っていたようです。

彼らがゆくゆくは母国のインフラ整備を牽引する人材に成長していく中で、今回のツアーが土木技術者としての視野を広げ、また将来日本と彼らの国の間の交流に少しでも役に立つことができれば望外の喜びです。ここにツアーの無事終了を報告するとともに、実施に際して多大な協力を頂いた関係各位に感謝の意を表する次第です。

学術交流基金管理委員会スティーア- WG：高木泰士(東工大)、上野成三(大成建設)、鈴木泰之(建設技術研究所)、柳川博之(土木学会) (敬称略)

第 68 回土木学会全国大会 国際関連イベント速報

平成 25 年 9 月 4 日～6 日の間、第 68 回土木学会全国大会が日本大学生産工学部（津田沼キャンパス）にて開催されました。その中で国際関連のセッションやイベントがいくつか開催されました。詳細は 10 月発刊の国際センター通信第 13 号に譲りますが、主なものを簡単に紹介いたします。

1. The 15th International Summer Symposium (9/4～9/6 8:40～10:10、10:25～11:55 開催)



第 15 回インターナショナルサマーシンポジウムが 3 日間にわたり開催されました。全国大会年次学術講演会国際セッションとして実施し、日本に滞在中の外国人留学生やエンジニアを中心に、67 編の投稿があり、合計 12 の各セッションで発表が行われました。各セッションとも活発な議論がなされ、参加者間で有意義な情報交換が行われました。

(左写真) 研究発表の様子

2. 海外支部会議 (9/4 11:00～12:30 開催)

土木学会海外支部からの代表および国際部門担当理事、国際センター長、次長が参集し、直近の活動状況や活動計画について報告がなされました。また、情報グループの小早川リーダーが、海外分会との相互の情報提供と発信について協力を依頼しました。



(右写真) 海外支部会議 各国挨拶の様子

3. 国際パネルディスカッション (9/4 12:40～15:55 開催)



今回は「持続可能な社会を実現する社会インフラの適切な維持管理・更新」をテーマとしてパネルディスカッションを開催しました。

東京大学の家田教授を座長として、アメリカ土木学会(ASCE)の Mr. Gregory E. DiLoreto 会長など海外から 5 名のパネリスト、2 名のコーディネーターを招へいし、活発な意見交換が行われました。会場からも積極的な質問がなされました。

(左写真) パネルディスカッションの様子

4. 第7回 JFES-JSCE-AIJ-WFEO 合同国際ジョイントシンポジウム (9/5 9:00~12:00 開催)

第7回自然災害リスク管理に関する日本工学会 (JFES)・土木学会 (JSCE)・日本建築学会 (AIJ)・世界工学団体連盟 (WFEO) 合同国際ジョイントシンポジウムが開催されました。

講演者から洪水、地震、津波など日本でも被害に見舞われる災害への対策や、災害を軽減するための技術等について紹介がなされました。

講演終了後は、参加者と講演者の間で熱心な質疑応答がなされました。



**WFEO 副会長、災害危険マネジメント委員会
委員長石井氏の開会挨拶**

5. Workshop for Young Engineers (9/5 13:00~17:45 開催)



グループ討論の様子

若手技術者国際ワークショップを来年の100周年記念で実施するワークショップのプレ会議と位置づけ開催しました。”Your Career as a Civil Engineer and Our Future Society”をテーマに、留学生、日本人学生および技術者、計33名が参加、6グループに分かれ、各グループで土木技術者としての将来のキャリアパスや社会貢献に関して議論し、その結果を参加者全員がそれぞれ1分間プレゼンテーションとして報告しました。

6. 海外ゲストテクニカルツアー (9/5 13:00~16:00 開催)



今回のテクニカルツアーは、NEXCO 東日本のご協力をいただき、東京外かく環状道路京葉ジャンクション現場見学を行いました。その後、東関東道浜町南高架橋にて先端機器を用いた点検現場を見学しました。

20数名の海外ゲストの参加があり、限られた時間ではありましたが写真撮影をしたり、担当者に質問をしたりするなど充実した時間を過ごしてもらいました。

(左写真) 東京外かく環状道路京葉ジャンクション現場見学

国際センターの活動 (土木学会会長 橋本 鋼太郎)

◆ACECC 参加報告

8月18日～22日にインドネシアジャカルタにおいて ACECC (アジア土木学会連合協議会) の第25回理事会と 6th CECAR (アジア土木技術国際会議) が開催されました。日本から橋本(会長)、磯部次期会長、岡田元会長、大西専務、上田国際センター長、住吉氏、堀越氏、山口教授、鳥居氏、中村氏、土橋氏等が出席しました。ACECC メンバー国のうち、インドネシア、アメリカ、韓国、台湾、フィリピン、日本等 10 か国の会長が出席し、会議は盛会でした。会議では Jakarta Protocol 「Civil Engineering for a Sustainable Future」が調印され、Asian Board Meeting 「Lessons learned from Past Natural Disasters」、会長セッション「Embracing the Future through Sustainability」、JSCE 技術交流会議 (インドネシアのインフラ整備に活躍されている日本の方々との交流) が開催されました。この他藤野東大教授から Keynote Lecture「Long-Span Bridges Vibration, Control, Seismic Retrofit and Monitoring – Recent Studies and Lessons Learned」が発表されました。

また、HAKI (インドネシア土木構造工学会) との協定締結、NEA (ネパール技術者協会) との協定更新が行われました。

今後は、ACECC の事務局を日本が担当することになりましたので、次回 2016 年 CECAR (アメリカ土木学会主催によりハワイにて開催) に向けて会員の積極的参加が求められます。



JSCE ブース

イベント情報

- ・ 10/9-12 : ASCE 年次大会 (アメリカ・ノースカロライナ州 シャーロット)
(<http://content.asce.org/conferences/asce-annual2013/>)
- ・ 10/23-25 : KSCE 年次大会 (韓国・江原道)

お知らせ

- ◆ 土木学会誌の特集記事の概要を JSCE の website (英語版) にアップしました。
<http://www.jsce-int.org/pub/magazine>
- ◆ 土木学会コンクリート委員会 ニュースレター No. 34 が発行されました。
<http://www.jsce.or.jp/committee/concrete/e/newsletter/Newsletter.htm>

御協力をお願い

国際センターでは、国際活動に関する“情報発信の強化”を目標に掲げ「国際センター通信」を配信しておりますが、更に配信先を拡大し、皆さまと情報を共有していきたいと考えています。

つきましては、皆さまより周囲の方々へ国際センター通信をご紹介いただき、国際センター通信の定期的配信を希望される方には、次の登録フォームよりご登録いただくよう御案内いただけませんか。何卒、御協力のほどよろしく願いいたします。

「国際センター通信配信希望者 登録フォーム」

- ・ 日本語版 : (<http://committees.jsce.or.jp/kokusai/node/31>)
- ・ 英語版 : (http://www.jsce-int.org/pub/registration/non-international_students)
- ・ 英語版 (日本の大学等への留学経験をお持ちの方) : (<http://committees.jsce.or.jp/kokusai/node/30>)

◆掲載記事募集します◆

国際センター通信では、会員の皆様から幅広く投稿記事を募集しています。国内外の産学官界に所属する技術者、研究者、行政官および学生等に配信すべきと考える記事を投稿してください。テーマはプロジェクト紹介、技術紹介、ご自身の体験談などです。

国際センター通信をより充実した、読み応えあるものにして行きたいと考えておりますので、ぜひ、ご協力くださいますようお願いいたします。

記事投稿の詳細はコチラ>>> (<http://committees.jsce.or.jp/kokusai/node/47>)

Yの独り言

「議論」とは、ラテン語の“よく見える、調べる”から来ており、さらには、“在る”ものを細かく砕いて良く調べるという意味である。つまり、ディスカッションをするということは、我々がお互いの考えや意見を交わしながら何を言わんとするのか慮り、進む方向先を見いだすことであろう。意見を交わす中で、意図せずに大げさな言葉やぞんざいな言い方、あるいは相手を批判したり、攻撃しているかのような声のトーンや態度をとっているかも知れない。でもそれは、自分の意見を伝えよう、自分の考えを理解してもらおうと一生懸命だからである。議論することで、我々自身が何を考え、何を言おうとしているのか、そして相手が何を考えているのか見えてくるのである。言い換えれば、自分の心の中を覗き込み、千千なる考えのかけらを拾い上げ、それらがびたりと納まるまであれやこれやと組み合わせをしている、それがディスカッションではないだろうか。

この国では、自分の考えを表に出すことを躊躇する人があるようだ。それは、攻撃的であるとか、批判的であるとか思われてしまう、自分の思いを誤解されてしまう、ということを感じているのだろうし、それ故に、相手も同じ気持ちを持っていると思ひこんでしまうようである。そして、何か言えば高飛車ないやな奴、と見られるものが怖いのだろう。

しかし、自分を示さないままで、どうやって自分の心奥底を見つめ、相手と対話できるのか？ 会話は滞りなく出来ても、ろくに理解し合うことはできないだろう。人は、いや、我々は、何か確実なものや真なるものを求めるのであれば、自らの心を開いて“ディスカッション”をすべきではないか。

【ご意見・ご質問】: JSCE IAC: iac-news@jsce.or.jp

本通信をより話題性に富んだ内容にするため、皆様のご意見やコメントをお聞かせください。

